令和５年度「高校生ステップアップ・プログラム」

実　施　報　告　書

１　「高校生ステップアップ・プログラム」とは　Ｐ１

２　各指定校の取組（19校）

空知	（１）北海道夕張高等学校	Ｐ２
	（２）北海道長沼高等学校	Ｐ３
	（３）北海道栗山高等学校	Ｐ４
石狩	（４）北海道札幌北高等学校（定時制）	Ｐ５
	（５）北海道有朋高等学校（定時制）	Ｐ６
	（６）北海道札幌白陵高等学校	Ｐ７
	（７）北海道江別高等学校	Ｐ８
後志	（８）北海道余市紅志高等学校	Ｐ９
胆振	（９）北海道白老東高等学校	Ｐ10
	（10）北海道追分高等学校	Ｐ11
	（11）北海道鵡川高等学校	Ｐ12
日高	（12）北海道平取高等学校	Ｐ13
渡島	（13）北海道南茅部高等学校	Ｐ14
	（14）北海道松前高等学校	Ｐ15
留萌	（15）北海道遠別農業高等学校	Ｐ16
宗谷	（16）北海道礼文高等学校	Ｐ17
オホーツク	（17）北海道雄武高等学校	Ｐ18
十勝	（18）北海道音更高等学校	Ｐ19
釧路	（19）北海道釧路江南高等学校	Ｐ20

３　高校生ステップアップ・プログラム実施要項　Ｐ21

北　海　道　教　育　委　員　会

「高校生ステップアップ・プログラム」とは

1　趣旨

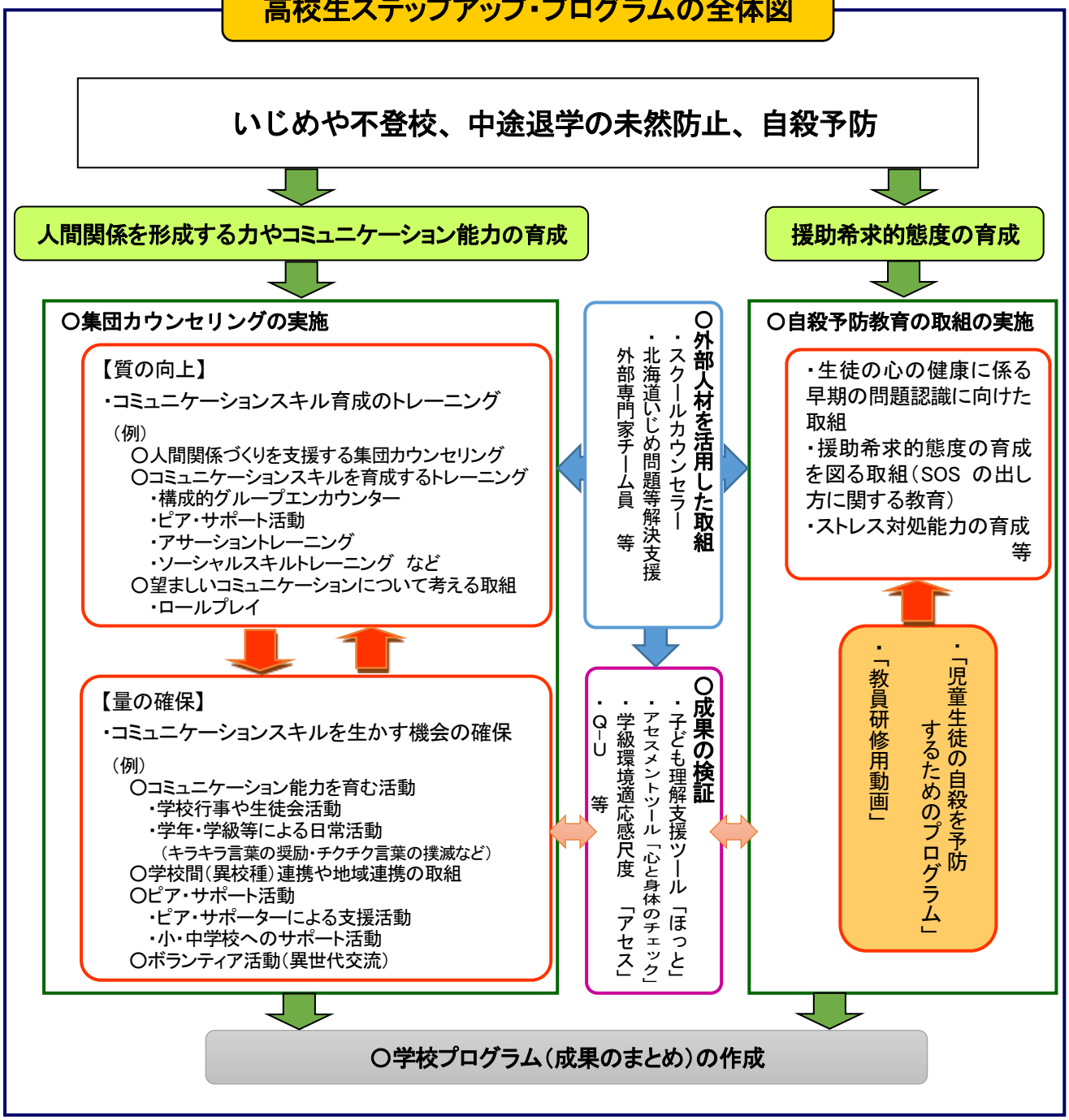
高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

2　事業内容

(1) 集団カウンセリングの実施
(2) 自殺予防教育の取組の実施
(3) 外部人材を活用した取組の実施
(4) 成果の検証
(5) 学校プログラムの作成

高校生ステップアップ・プログラムの全体図



令和５年度高校生ステップアップ・プログラム

北海道夕張高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：46 名

本校の目指す生徒像
・心豊かな生徒
・知性を磨く生徒
・主体的に行動する生徒

本校の現状
小・中・高と固定化した人間関係の中で、他者との関わり方についての悩みを抱えている生徒が見られる。

本校の取組の特徴
1　スクールカウンセラーによる集団及び個別カウンセリング
2　スクールカウンセラーによる校内教員研修

取組の内容

○　自殺予防教育の取組

1　スクールカウンセラーによる集団及び個別カウンセリング

(1)　1学年「心にあるものを伝えること」
目的：絵本を使ったアクティビティを通して、自分だけが抱えている物事や状況を他者に言葉で説明することの難しさと面白さを知ることができるようにする。

生徒の感想：「自分の気持ちを人に伝えることは、実はとても難しいと思った。」
「自分の思っていることが相手に伝わると安心した。」

(2)　2学年「感情（怒り）のコントロール」
目的：「怒りは何のためにあるのか」、「人はなぜ怒りを抑えなければならないのか」について考え、「怒り」との上手な向き合い方について学ぶ。

生徒の感想：「怒りがわいたときに脳内で何が起こっているのかを理解できた。」
「怒りは動物が生きていくためには必要不可欠なものだが、社会生活では上手にコントロールをしていくことが大切だとわかった。」

(3)　3学年「自立ってなんだろう？依存から考えてみよう」
目的：「自立とは何か」について考え、高校卒業後の人間関係づくりの方法や人との付き合い方について学ぶ。

生徒の感想：「自立と依存の違いや関係性について初めて知ることができた。」
「社会に出たら何にも依存せずに自立しなければならないと思っていたが、むしろ適度に頼ることができる人を増やしていくことが大切だと感じた。」

2　スクールカウンセラーによる校内教員研修

「マイルドな障がいを抱える子どもたちの理解について」をテーマに校内教員研修を行った。生徒の特性に応じた支援や指導方法、思春期における心身の特徴などについて学んだ。

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施

結果をもとに教職員やスクールカウンセラーとの個別面談を実施したり、集団カウンセリングの内容を検討したりすることで、悩みを抱える生徒への早期対応に努めた。

取組の成果等

○　成果

スクールカウンセラーによる集団カウンセリングの実施により、援助希求的態度やストレス対処能力の育成・向上を図ることができた。

○　課題

「心と身体のチェック」の結果や個別面談に関する情報共有が十分に図れなかったため、教員全体で実施方法や生徒へのフィードバックの仕方について理解を深める必要がある。

○　次年度に向けて

スクールカウンセラーと連携し、現状の集団カウンセリング体制を維持するとともに、人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成についての校内研修をより一層充実させる。

令和５年度高校生ステップアップ・プログラム

北海道長沼高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：111 名

本校の目指す生徒像
・生活習慣・マナーを身につけた生徒
・集団の中で活動する生徒
・進路実現に向けて自らを見つめる生徒

本校の現状
・コミュニケーションがうまく取れず、孤立傾向にある生徒への支援が必要
・社会性や対人関係を構築するための施策が必要

本校の取組の特徴
外部講師を活用して
1　人間関係を形成するコミュニケーション能力の育成
2　差別や偏見をなくすとともに人権を尊重する態度の育成

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　人間関係を形成するコミュニケーション能力の育成
ア　北海道医療大学教授による心の健康増進を図る講話及びグループワークを行い、生徒は心の健康の大切さを学ぶことができた。
イ　日本ファシリテーション協会会員による話合い技法の講義及びグループワークを行い、生徒は他者と良好な人間関係を築くコミュニケーションの在り方について理解を深めた。
ウ　株式会社「地球はメリー・ゴーランド」職員によるコミュニケーションスキルトレーニングを行い、生徒は自己理解及び他者理解の重要性について学んだ。

2　差別や偏見をなくすとともに人権を尊重する態度の育成
ア　アイヌの人たちの歴史や文化に関する民族学習としてウポポイを見学し、生徒は文化や多様性を尊重する気持ちを育んだ。
イ　北海道レインボー・リソースセンター職員による多様性に関する講話を行い、生徒は性的マイノリティについての理解を深め、自分と異なる他者との共生について学んだ。

【アイヌ民族学習】

【ウポポイの見学】

【多様性に関する講話】

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施
長期休業前後の年４回実施、結果について担任を中心とした教職員で共有し、日常的な観察や声かけに活用した。

取組の成果等

○　成果
・多くの分野の外部講師を活用したことにより、様々な角度から生徒に対してアプローチすることができ、どの生徒にとっても深く学ぶことのできるプログラムとなった。
・自分及び他者を大切にする気持ちを養うためのプログラムを実施したことにより、良好な人間関係を築こうとする意識を醸成することができた。

○　課題
・アセスメントツールの効果的な活用に向け、「心と身体のチェック」結果の分析方法について、教職員への研修を行う必要がある。

○　次年度に向けて
・全教職員が関わり、生徒の発達段階に合わせてより効果的に実施できるよう、内容の精選と年間指導計画の見直しを行う。
・町内の小・中学校と連携した取組について検討する。

令和５年度高校生ステップアップ・プログラム

北海道栗山高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：113 名

本校の目指す生徒像

・主体的に知性を磨き、豊かな情操を身につける生徒
・豊かな自然に親しみ、強固な心身を鍛えていく生徒
・勤労を愛し、奉仕の精神を持ち社会貢献できる生徒

本校の現状

・素直な生徒が多いが、コミュニケーションスキルや人間関係の構築に課題を抱える生徒が見られる。
・不登校傾向の生徒に対するケアが必要である。

本校の取組の特徴

1　専門家からの指導助言及び教職員研修による教職員のカウンセリング力の向上
2　日常から困り感をもつ生徒のストレス対処能力及びコミュニケーションスキルの育成
3　不登校傾向の生徒に対する支援

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　専門家からの指導助言及び教職員研修による教職員のカウンセリング力の向上

・全校生徒を対象として、４月と 11 月に教育相談週間を設定し、全教職員が生徒と面談を行い、生徒の日常の不安や悩み等を把握するとともに、全教職員で情報の共有を図った。

2　日常から困り感をもつ生徒のストレス対処能力及びコミュニケーションスキルの育成

・１学年を対象に、保健講話を実施し、性の多様性やデートDVについて学び、自他ともに認め合う人間関係の育成を目指した。
・２、３学年の保健の授業では、自殺予防の観点から、意思決定と行動や心の問題について学習するなど、自殺予防教育を行った。
・スクールカウンセラーによる講話を行い、誰かに悩みなどを相談することの重要性や心身の健康についての理解を深めた。

3　不登校傾向の生徒に対する支援

・保健室等の別室での学習支援を継続的に実施した。
・不登校傾向の生徒にはオンラインカウンセリングを実施した。
・子ども理解支援ツール「ほっと」を実施し、生徒のコミュニケーションスキルの現状と課題を把握し、教職員間で共有した。

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施

・長期休業明けの生徒の様子を把握する為の有効な取組であった。
・次年度は、回収率の高い紙媒体での実施と、集計作業の負担が少ない Google フォーム等での実施を併用する予定。

取組の成果等

○　成果

・教職員による生徒への面談を通して、生徒と教職員との信頼関係が深まったことにより、生徒が自己肯定感を高める機会が増えた。
・カウンセリング支援の充実により、学校を安心・安全な場だと肯定的に評価する生徒が増加した。

○　課題

・生徒の主体性を育むため、地域の関係団体と連携したフィールドワークや課題学習を通して、生徒のコミュニケーション能力や自己肯定感をさらに高めていく必要がある。
・入学者数の増加に伴い、生徒同士のコミュニケーション不足が見られるため、人間関係を形成する力を育成する取組を充実させる必要がある。

○　次年度に向けて

地域との連携強化のため、北海道介護福祉学校を中心に、地域の小・中学校や福祉施設との調整を図り、連携を深めていくことによって、生徒のコミュニケーション能力をさらに高めるとともに、本校生徒として相応しい「人間力」の育成を図っていく。

北海道札幌北高等学校

課　程：定時制
学　科：普通科
生徒数：94 名

本校の目指す生徒像
・広く学び、深く考え、自ら行動することができる生徒
・人を人として尊重し、豊かな心を持った生徒
・前を向き、挑戦し、未来を切り拓くことができる生徒

本校の現状
・コミュニケーション能力と社会性の育成が必要
・心の健康教育の充実に向けた校内環境の整備が必要
・特別支援教育に関する教職員のスキルアップが必要

本校の取組の特徴
1　スクールカウンセラーによる取組
2　外部講師による講話
3　保健体育科の授業
4　アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施

取組の内容

○　自殺予防教育の取組

1　スクールカウンセラーによる取組
・援助希求的態度の育成を目的とした講話「心の授業～良いコミュニケーションのコツ～」の実施。
・早期の問題認識（心の健康）を目的とした講話「心の授業～命の危機・『自殺』を防ぐために～」の実施。
・事例研修「心の教育」の実施。
・毎月、生徒、保護者を対象とした個別のカウンセリングを実施するとともに、必要に応じてケース会議やコンサルテーションを実施。

2　外部講師による講話
・ストレス対処能力の育成を目的とした講話の実施。

3　保健体育科の授業
・早期の問題認識（心の健康）を目的とした授業の実施。

4　アセスメントツール「心と身体のチェックリスト」の実施
・怒りやイライラ、心配や不安、環境のストレスや身体の不調などが一目見てわかるため、実施結果を全教職員で確認し、早期対応につなげることができた。
・欠席や早退も少なく平常に学校生活を送っている生徒の中にも、高ストレスを示した者がおり、生徒理解を一層深めることができた。

取組の成果等

○　成果
４月の早い段階で、第１学年に対しスクールカウンセラーの紹介と講話を行い、７月と９月にスクールカウンセラーによる「心の授業」を実施することにより、様々な相談ができる大人の一人として、本校にもスクールカウンセラーがいることを理解してもらうことができた。また、何かあればいつでも相談できる場所として環境を整備することができた。さらに、今年度は、第４学年を対象に、社会生活に向けて不安を少しでも少なくする心の持ち方等の授業や講話を実施した。

○　課題
教職員へ向けて、外部専門家チームを講師として招聘し研修会を実施した。今後もさらに、特別支援教育への理解と合理的配慮の実践に向け、スキルアップを図るための研修を実施する必要がある。

○　次年度に向けて
本年度実施した取組を継続するとともに、入学時の予防教育に重点を置き、第１学年を中心にスクールカウンセラーを活用した講話や担任による面談を計画的に実施する。

北海道有朋高等学校

課　程：定時制
学　科：普通科・事務情報科
生徒数：252 名

本校の目指す生徒像
・自ら伸ばせ　輝かせ
・心豊かに　気品あれ
・進取で強く　しなやかに

本校の現状
多くの悩みを抱え、不登校傾向のある生徒に対して、校内委員会と各年次がスクールカウンセラーと連携しながら支援に努めている。

本校の取組の特徴
1　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
2　パートナーティーチャーや児童相談所、医療機関など外部専門家との連携及び積極的な活用
3　北海道医療大学心理科学部臨床心理学科及び看護福祉学部福祉マネジメント学科の学生によるアイスブレイク、ピア・サポート活動及び学習支援

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
・生徒、保護者、関係教職員を対象としたカウンセリングを実施した。
・教職員全体の相談体制強化と生徒理解スキルの向上を目的に、スクールカウンセラーによる校内研修会を実施した。

2　外部専門家との連携及び積極的な活用
・外部専門家による授業参観や担任団との情報交換を通して、課題を抱える生徒に対する支援について指導・助言を受けた。

3　北海道医療大学生によるアイスブレイク、ピア・サポート活動の実施
・大学生によるアイスブレイク、ピア・サポート活動をそれぞれ年間３回実施した。授業参加やグループ学習への支援を通じて、コミュニケーションスキルの向上を図った。

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施と活用
・「心と身体のチェック」を年４回実施した。特に長期休業明けにストレスや不安を抱えている生徒をリストアップし、個別面談を実施した。また、希望者等にスクールカウンセラーとの相談を実施するなど、見守り活動を継続した。

取組の成果等

○　成果
・スクールカウンセラーのアドバイスにより、状況に応じて外部機関（医療機関、児童相談所等）へとスムーズに繋ぐことができた。
・長年に渡る専門家からの助言が功を奏し、生徒に寄り添った指導の徹底及び相談体制の強化が徐々に図られ、生徒が相談しやすい環境が整ってきている。
・個別カウンセリングの実施により、適切な支援を受けて学校生活を一層意欲的に送る生徒が増え、不登校及び中途退学者が減少した。
・大学生との活動を通して、クラス全体の雰囲気が良くなり、学習活動が活発になった。

○　課題
・アセスメントツールの更なる有効活用のため、教職員全体で検討する必要がある。
・多様な課題を抱えた生徒が多数在籍している中で、継続的なカウンセリングを必要とする生徒も増加傾向にあり、相談を希望する全ての生徒及び保護者へ対応することが難しい。

○　次年度に向けて
・アセスメントツールの更なる活用を教職員全体で検討する。
・校内におけるケース会議の持ち方について研修会を実施する。
・オンラインによる教育相談体制の充実を図る。

北海道札幌白陵高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：250 名

本校の目指す生徒像
・感謝の心を持ち、社会に貢献する生徒
・自ら進んで視野を広め、知性を磨く生徒
・心身を鍛え、たくましく生きる生徒

本校の現状
・生徒一人一人が自己理解や他者理解を深め、自他の命の尊さや価値を再認識する必要がある。
・生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。

本校の取組の特徴
１　外部講師を招いた講話による「命」の大切さの再認識、自己理解及び他者理解の深化
２　スクールカウンセラーの個別カウンセリングの実施による、きめ細かな生徒理解

取組の内容

○　自殺予防教育の取組

１　外部講師を招いた講話による「命」の大切さの再認識、自己理解及び他者理解の深化

講演「命の大切さ」　　講師：助産師　吉田 征子 氏

【内容】
人と人との関わりはどうあるべきか（コミュニケーション）、援助希求の重要性、男女交際、デートＤＶ、情報選択の方法、男女の心の違いと体の仕組み、ＬＧＢＴＱ、性的同意、いのちの誕生等について

【生徒の感想】
・話をする、受け入れることを忘れないことが大切。
・自分が思うものと相手が思うものは大幅に違うことがほとんど。
・相手のことも自分のことも大切にする。
・妊娠や出産は命がけで生命をつなぐもので、軽いものではないと感じた。

【講演の様子】

２　スクールカウンセラーの個別カウンセリングの実施による、きめ細かな生徒理解

多様な悩みを持つ生徒に対してスクールカウンセラーによる個別カウンセリングを行い、きめ細かに生徒理解を深めた。また、生徒及び保護者への対応等についてスクールカウンセラーから得た助言を教員間で共有し、生徒理解を深め、一層寄り添った支援となるようにした。

※　アセスメントツールの結果及び分析等の活用

「心と身体のチェック」の結果や分析結果を踏まえ、個別面談時に一人一人の困り感や悩みに触れ、必要に応じて医療機関等、専門機関とつなげることができた。長期欠席の前後に生徒の心理面の変化を見取ることができ、学級担任が生徒理解の一助としている。

取組の成果等

○　成果
・助産師の経験や体験に基づいた講話をとおして、「命」や「生き方」といった抽象的な概念について、自分の問題として捉え深く考えることができた。
・多様な悩みを抱える生徒及び保護者のニーズに対する専門的見地から的確な見立てや助言が、解決に向けた具体的な取組につながった。

○　課題
・知識を実践の場へとつなげるため、コミュニケーションスキルや援助希求スキル等の具体的な方法について学ぶ機会を設定する必要がある。
・問題の未然防止と何らかの脆弱性を抱えた生徒の早期発見と即応的支援等、課題予防的教育相談を充実する必要がある。

○　次年度に向けて
・生徒の実態及びニーズを的確に把握し、学校・家庭・外部機関とつながり、チームとなって生徒を支援する体制を検討する。

北海道江別高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科・事務情報科・生活デザイン科
生徒数：736 名

本校の目指す生徒像
明朗快活で何事にも積極的で地道な努力を続け、自律的に行動でき、他者への思いやりを大切にできる生徒

本校の現状
対人関係において、周囲への配慮から自己開示することに消極的な生徒が見受けられる。

本校の取組の特徴
1　ピア・サポート研修会の実施…生徒会保健局の活動として実施し、有志参加も幅広く受け付ける。
2　保健講話の実施…１学年の早期において青年期の心理状態の特徴を客観的に学ぶ。

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　ピア・サポート研修会の実施

自己理解及び他者理解を深めつつ、自己肯定感を高める中で自己開示能力の育成をねらいとして実施した。保健局を中心に有志参加の生徒を含め、自己開示を意識するアサーショントレーニングを行った。「相談すること」という研修テーマでは、相手がどのように受け止めるかを想像しながら、自分の気持ちがきちんと伝わる言葉遣いをじっくり考えた。参加者で共有した際、「相手の気持ちを受けとめながら落ち着いて話すことが大事」「聞き方によって話し手の気持ちが変わることに気付いた」という感想があり、“聞くこと”について客観的に考える重要性を認識できた。また、教員によるロールプレイングを観察する場面では、気持ちのよい会話について「身体の向きや言葉以外の態度や動きがとても大事だと分かった」などの感想が寄せられた。

2　保健講話の実施

青年期特有の心理的特徴を知り、様々な葛藤に悩むことは当然あり得ることを学んだ。また、ストレスマネジメントの重要性と方法や心身の変化に対する手当の仕方について学ぶことができた。「不安に感じるのは普通のことで自分だけではないと知り安心できた」「深呼吸するだけでも気持ちが落ち着き、ストレスを解消できることが分かった」という声が多く上がった。加えて担任による生徒への日常の具体的な支援にアセスメントツール「心と身体のチェック」の分析結果を有効に活用することができた。

【保健講話の様子】

取組の成果等

○　成果

ピア・サポート研修会に参加した生徒にはコミュニケーションスキルの向上が見られ、感想文からも他人の気持ちを想像することや考えることなどの他者理解について、積極的になっていく内的な変化の様子を読み取ることができた。

○　課題

今回、保健局員以外にも有志生徒が複数参加した。今後において研修の継続と内容の充実を図り、活動に対する全校生徒の認知度をより一層高めるための教育的な支援を行う必要がある。

○　次年度に向けて

ピア・サポート研修会を受けた生徒が、学年やクラス、部活動等の中で研修によって身に付けたスキルを日常的に発揮できるよう教職員間の連携体制を整える。

北海道余市紅志高等学校

課　程：全日制
学　科：総合学科
生徒数：81 名

本校の目指す生徒像
・主体的・協働的に深く学び行動する生徒
・自他を尊重し、思いやりの心を持つ生徒
・心身を鍛え、自身と根気を持って生きる生徒

本校の現状
優しく素直な生徒が多いが、コミュニケーションスキルや人間関係の構築に課題を抱える生徒が見られる。

本校の取組の特徴
1　専門家を講師に迎え、生徒間のよりよい人間関係の形成を支援する「集団カウンセリング」や「スキルアップトレーニング」の実施
2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの機会の充実
3　子ども理解支援ツール「ほっと」「ほっとプラス」を活用し、全教員による面談を計画的に実施
4　保健体育科の授業等でのストレスやその対処方法についての学び

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　生徒間のよりよい人間関係の形成の支援
・元北海道医療大学看護福祉学部准教授　長谷川　聡　氏を講師に招き、仲間づくり支援やコミュニケーションスキルを育成する集団カウンセリングを３回実施した。
・スキルアップトレーニングの実施により、生徒の社会的なスキルアップや心の健康増進を図ることができた。また、よりよい集団にしていくための多くのヒントを得ることができた。

【集団カウンセリングの様子１】

2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの機会の充実
生徒が抱える悩みに対してきめ細かな対応を行い、教職員の生徒理解の深化に努めた。

3　子ども理解支援ツール「ほっと」「ほっとプラス」の活用
結果から生徒一人一人の特徴及び学級全体の状況を把握し、学級経営や全教員による個人面談を行う際の基礎資料とした。

【集団カウンセリングの様子２】

4　保健体育科の授業等でのストレスやその対処方法についての学び
ストレスを抱え込まないことの大切さを理解した。

取組の成果等

○　成果
「高校生ステップアップ・プログラム」により「自殺予防教育」の取組を実施することで、普段の授業等とは異なる生徒の様子を知ることができ、生徒も教員もリフレーミングできるよい機会となった。また、集団カウンセリングにおいて、普段明るく過ごしていると教員側が捉えていた生徒の表情が硬いことに気付き個別面談を行った結果、生徒の悩みに寄り添うことができ、問題行動の未然防止につなげることができた。

○　課題
全校生徒を対象とした取組までには至らなかったため、関係分掌等と連携の上、校内における調整を図る必要がある。

○　次年度に向けて
・本年度実施した取組を継続し、教員のスキルアップを図るとともに、入学時の予防教育に重点を置き、１年次生を中心にスクールカウンセラー等を活用した講話や全教員による面談を計画的に実施する。
・年度始めの早い時期において、アセスメントツール「心と身体のチェック」や「ほっとプラス」などの分析結果を教職員全体で共有し、生徒のよりよい人間関係の構築に向けた取組を軸に、組織的な生徒支援の充実を図る。

北海道白老東高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：140 名

本校の目指す生徒像
・主体的に取り組むことができる生徒
・多様な人々を尊重し、自他の生命尊重ができる生徒
・協働して様々な課題を解決できる生徒

本校の現状
・中学時、不登校を経験し、自己肯定感が低い生徒が多い。
・ストレスへの対処を身につける力が必要。
・コミュニケーション能力の育成が必要。

本校の取組の特徴
1　スクールカウンセラーによる講話や構成的グループエンカウンターの実施
2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施
3　アセスメントツール「ほっと」「ほっとプラス」「心と身体のチェック」の実施

取組の内容

○　スクールカウンセラーによる支援

1　スクールカウンセラーによる講話や構成的グループエンカウンターの実施

１学年３時間・２学年２時間・３学年３時間のスクールカウンセラーによる講話・構成的グループエンカウンターを実施した。

・１学年　コミュニケーションと自殺予防教育・自己分析（エゴグラム）など
・２学年　ストレスの解消方法・コミュニケーションなど
・３学年　恋愛講座として、性の多様性や性的同意、コミュニケーションなど

生徒の感想では、「今まで受けてきた性に関する授業や社会的立場の平等などの授業は、これから生きていく上でとても大切なことだし、困ることがあったら教えてもらったことを思い出そうと思った」「恋愛において相手の気持ちをしっかり理解することが大切だと感じた」など、取組に対して肯定的なものが多かった。

2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施

希望した生徒・保護者を対象に実施後、その結果を基に関係職員とスクールカウンセラーによる情報交換を実施し、今後の生徒支援を協議した。

3　アセスメントツール「ほっと」「ほっとプラス」「心と身体のチェック」の実施

「ほっと」は４月と 10 月、「ほっとプラス」は４月、「心と身体のチェック」は夏季休業前後と冬季休業前後に実施し、それぞれの結果を担任・学年に周知し、生徒支援に活用した。

取組の成果等

○　成果

・スクールカウンセラーによる講話を実施したことにより、ストレスの対処法や相手の立場を尊重する姿勢を身に付けることができた。
・スクールカウンセラーの個別面談により、普段知ることができなかった生徒の困り感や家庭状況を知り対応することができた。

○　課題

・複数のアセスメントツールを同時期に検査したため、生徒の実施への意欲がそがれ、正しい結果が反映されないことがあったことから、実施時期の検討やアセスメントツールの活用について、教職員が十分に理解する必要がある。
・コミュニケーションの講話を聞いた直後は、内容を意識した言動が見られるが、時間の経過とともに、対応が長続きせず友人関係が険悪になることから、継続して実施する必要がある。

○　次年度に向けて

・今後も継続的に、集団形成プログラム、自殺予防の講座を実施できるよう計画していく。
・アセスメントツールを活用した生徒理解に関する教員研修を計画していく。
・スクールカウンセラーの個別カウンセリングを今後も継続する。

北海道追分高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：48 名

本校の目指す生徒像

主体的・協働的に学習に向かう。自律的に行動し、実践力がある。豊かな感性をもち、他者に寛容。相手の意見を尊重し、自分の意思を表現できる。

本校の現状

生徒自ら状況判断し、適切に行動する能力と自己肯定感の育成を図るための継続的な取り組みが必要である。

本校の取組の特徴

1　教育相談による生徒理解の深化とサポートを図る。
2　集団カウンセリングを通して、生徒の健康教育の充実を図る。

取組の内容

○　スクールカウンセラーによる支援

1　教育相談による生徒理解の深化とサポートを図る。

(1) 分析結果の活用

・校内委員会（生徒サポート委員会）を中心に教職員で共有し、日常的な観察や声かけを行った。
・hyper-QU の結果をもとに、全校生徒を対象に教育相談週間を設定し、実施した。

心と身体のチェック：以前と比較し“かなりあてはまる“と答えた箇所が増えた生徒、全て同じ数値を回答した生徒、教員の予想と大きく異なる回答をした生徒には、回答したときの気持ちを確認した。

ほっと：合計点の偏差値が 40 以下の生徒に着目し、援助要請や仲間強化が低い生徒には、定期的に面談を実施するなど、授業や行事で必要に応じて配慮した。

(2) スクールカウンセラー（以下、SC）との連携と個別面談

・SC と分析結果を共有し、ケース会議にも参加してもらった。
・SC により支援が必要な生徒への面談を行った。

2　集団カウンセリングを通して、生徒の健康教育の充実を図る。

症状や問題行動の発現を防ぐため、学年別に予防的対応を行なった。

・１学年テーマ「ストレスの理解と対処方法について」
生徒の感想　「意外とストレスが溜まっていることに気付いた。教わった対処方法を実践してみたいと思った。」

【集団カウンセリングの様子】

・２学年テーマ「対人関係とアサーションについて」
生徒の感想　「自分が嫌な気持ちになった時には、６秒数えて怒りを爆発させないようにしてみようと思った。」

・３学年テーマ「卒業後に向けた心構えについて」
生徒の感想　「４月から新しい環境での生活がはじまるので、何か悩みがあったら、誰かに相談しようと思った。」

取組の成果等

○　成果

上記の取組により、ほっとでは、１年生「関係維持」「仲間強化」「自己統制」「援助要請」の４因子、３年生「援助要請」の１因子で上昇した。全学年で合計点の偏差値が 10 以上上昇したのは６名、うち偏差値が 40 以下で上昇した生徒は３名だった。

○　課題

全校生徒の約 16%は、困ったことや悩みを友達に相談できないと回答し、安定した人間関係が築けず、友達と深い話ができなくなっていることが課題である。本音で話し合い、心が触れ合う人間関係づくりが必要である。

○　次年度に向けて

学校全体で生徒の援助要請の因子を高めていけるよう SC との連携を継続する。学級開きやリーダー研修、集団カウンセリングの時間を活用し、自己理解・他者理解・自他受容ができるよう、構成的グループエンカウンターを行う。また、学校全体の教育活動を通して、アサーショントレーニング、ソーシャルスキルトレーニング、場に応じたコミュニケーションスキルトレーニングを取り入れる。

北海道鵡川高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：130 名

本校の目指す生徒像

一人ひとりの個性を伸ばし、明るく豊かでたくましい人間を育成する。（学校教育目標）

本校の現状

近年は特に「対人関係が苦手」「精神的に不安定」等、学校生活に不安を抱え、支援やサポートが必要な生徒が多く入学してくる傾向がある。

本校の取組の特徴

１　「コミュニケーションスキルアップトレーニング（ＣＳＴ）」の取組
２　充実した教育相談活動

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

１　「コミュニケーションスキルアップトレーニング（ＣＳＴ）」の取組

生徒サポート委員会を中心に、コミュニケーションスキル向上のためのトレーニングや人間関係づくりを支援する集団カウンセリング、外部講師による講演や授業などの取組を継続的に実施。

・８月、自殺予防の観点から、１・２年生は人間関係づくり、３年生はコミュニケーションの活用（自己主張）といった内容のＣＳＴを実施した。
・11 月及び 12 月、不登校などの未然防止や自分の感情や考えを表現したり、他者の感情や考えを受け入れたりすることをねらいとした絵本セラピーを実施した。

２　充実した教育相談活動

教育相談担当教員を中心に、スクールカウンセラーによる個別カウンセリング、担任や学年団、養護教諭による日常的な面談、全校生徒対象の教育相談を実施。

・毎月１回、スクールカウンセラーによる個別の教育相談を実施した。（12／８現在で生徒はのべ 31 名、保護者はのべ３名が教育相談を受けた。）
・４月、１年生を対象に、クラスの集団づくりをねらいとした人間関係づくりや集団カウンセリングなどを実施した。
・１年生は【傾聴】、２年生は【アサーティブな考え方】、３年生は【自己主張】をテーマに、スクールカウンセラーによるＣＳＴの授業を実施した。

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」等の実施

・「心と身体のチェック」は、Google forms を利用して実施した。
・９月及び１月、教職員向けに「hyper-QU」の分析として校内研修を実施し、前回との比較からのケース会議を行い生徒理解や生徒との関わり方に活用した。

取組の成果等

○　成果

授業内容の改善等を通して、コミュニケーションについての意識が変化している生徒が増えてきたように感じる。また、スクールカウンセラーの授業や、教職員向けの研修を実施することで先生方の理解が深められ、ケース会議を実施することで、様々な特性をもった生徒に対しての悩みや授業中の取組について共有することができた。さらに、外部講師の方による授業なども複数回実施することができた。

○　課題

本校生徒には精神的な未熟さや生徒の特性による人間関係のトラブルが存在し、自分の言動や行動が他者にどのような影響を与えるのかを理解していない生徒も多いため、今後、校内研修も含めて、担任や教科担任、部活動顧問だけではなく、スクールカウンセラーや外部機関との一層の連携が必要と感じる。

○　次年度に向けて

次年度も引き続き継続して実施していきたい。年々幼い考えの生徒が増えているため、このプログラムを活用して社会に出て活躍できる生徒の育成に努めたい。また、生徒の心のケア等の校内研修などを複数回実施し、アンケートデータの活用や各種データの比較、時期によりどのような変化が生じたかなどを共有し、集団の中における個々の生徒理解に生かしていきたい。

北海道平取高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：38 名

本校の目指す生徒像
・自己実現に向けて意欲的に活動し挑戦し続ける生徒
・健やかな心身を持ち互いに認め合う生徒
・郷土愛と国際感覚を身に付け地域に貢献できる生徒

本校の現状
少人数の集団のため、学年を問わず人間関係を形成している。しかし、人間関係が崩れた場合は、生徒間での修復が困難である。

本校の取組の特徴
1　援助希求的態度の育成における「心と身体のチェック」の効果的な活用
2　コミュニケーションスキル育成のトレーニング

取組の内容

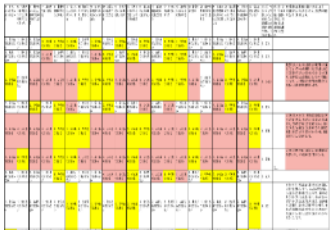
○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　援助希求的態度の育成における「心と身体のチェック」の効果的な活用

(1)　「心と身体のチェックシート」による支援が必要な生徒の把握

長期休業１週間前に実施した結果を学年団で共有、支援が必要な生徒を把握し、休業期間前に個人面談や SC によるオンラインカウンセリングを実施した。

支援が必要な生徒の把握については、教職員の経験や力量に頼らず、客観的に把握するため、生徒の回答について「４　よくあてはまる」を赤色、「３　ややあてはまる」を黄色、「自由記述欄」を赤色に色分けし、赤色の数が３つ以上ある生徒に学年団から必ず声をかけるよう工夫した。



【心と身体のチェックシート】

(2)　多様なアセスメントツールによる生徒理解

「心と身体のチェック」等を活用して生徒の心の状況を把握し、全教職員で生徒の心の変化を確認し、情報を共有するとともにフォローアップした。

2　コミュニケーションスキル育成のトレーニング

(1)　スクールカウンセラー（以下、SC）による援助

SC による個人カウンセリングと集団ソーシャルスキルトレーニング、集団カウンセリング等について、適切な時期と内容を近隣高校と連携し実施した。

【集団カウンセリングの様子】

(2)　実施後の生徒の姿

SC による複数回のソーシャルスキルトレーニングにより、生徒会行事、進学・就職活動等の場面で、生徒は自分の行動特徴を分析して対応する姿が見られた。

取組の成果等

○　成果
・生徒は、自分の性格を分析し、コミュニケーションスキルを向上させている。また、自分では解決できない不安や問題をアセスメントツールで伝えるなど援助希求的態度が身に付いていると感じられる場面が増えてきた。
・教職員は、アセスメントツールの分析により生徒の心の状況を客観的に把握し、適切な時期に外部専門家人材とチームで対応することができた。

○　課題
・生徒は、複数のアセスメントツールやいじめ等アンケートなど、年間で複数のアンケート等に回答することから、実施目的の理解が浅い。また、生徒への結果の還元方法の検討が必要である。

○　次年度に向けて
・生徒に対して実施目的等について丁寧に説明する等の工夫をし、より効果的な活用を検討する。

北海道南茅部高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：26 名

本校の目指す生徒像
・何事にも積極的に挑戦する生徒
・思いやりをもち、規律正しく生活ができる生徒
・健やかな心身・地域への誇りをもつ生徒

本校の現状
本校生徒は、温厚な性格であるが、コミュニケーションに苦手意識がある生徒が見られることから、コミュニケーション能力の育成が課題である。

本校の取組の特徴
1　全教職員による組織的な教育相談
2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリング
3　スクールカウンセラーによる心理教育

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　全教職員による組織的な教育相談（年間３回）
年度初めに本校生徒が話したい教員を選択し、面談担当者を設定した。長期休業明けの、生徒の心が不安定になりやすい時期に面談を行うことにより、生徒が一人で問題を抱えることのないように支援をした。
また、面談前に「アセス」及び「ほっと」等の結果を全教職員で確認した。生徒一人一人について担任や面談担当者と情報共有することにより、深い生徒理解につなげることができた。

2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリング（年間７回）
希望のあった生徒及び教員が必要と判断した生徒に対して個別カウンセリングを実施した。生徒は悩みの相談だけでなく、スクールカウンセラーとのソーシャルスキルトレーニングを通して、生徒自身の苦手の克服に取り組むことができた。

3　スクールカウンセラーによる心理教育（年間８回）
１学年の生徒を対象に、「話すスキル・聞くスキル・人と関わるスキル」の向上を目的とした心理教育を実施した。また、心理教育においては、グループ活動をする機会を多く設定することにより、自分の気持ちを表現することや、仲間同士で相互に理解し合う経験を重ねた。

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施
気になる回答をした生徒や長期休業前後の回答に大きな変化があった生徒について教員間で情報共有をした。その情報を本校で実施している教育相談に反映させることで、生徒の抱える問題を把握しやすくなった。

取組の成果等

○　成果
・教育相談を通して、生徒が相談しやすい環境をつくることができた。
・生徒は、スクールカウンセラーの専門的な助言により、前向きな行動を取るようになった。また、円滑なコミュニケーションをとるためのスキルを向上させることができた。
・生徒の感想
「先生との距離が縮まり、普段から話しかけやすくなった。」「悩みをそのままにしておくのではなく、どうにかしようと思うようになった。」

○　課題
今年度は高校入学をきっかけに周りの環境が大きく変わる１学年に対して心理教育を実施したが、実態に合わせて他学年での実施も検討していく必要がある。

○　次年度に向けて
本校に在籍する全生徒が、悩みを抱えることなく、安心して学校生活を送ることができるように、生徒の実態に合わせて今年度実施した取組を継続する。また、スクールカウンセラーと密に連携し、心理教育の内容をより生徒のニーズに合わせたものに改善する。

北海道松前高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：55 名

本校の目指す生徒像

1　自ら学び自ら考え積極的に行動する人
2　規律を守り心身ともにたくましい人
3　他を思いやり郷土愛と広い視野を持つ人

本校の現状

・自己表現が苦手で、人間関係を築くことに課題を感じている生徒や自己肯定感の低い生徒が見られる。
・今年度入学者に不登校傾向の生徒が見られる。

本校の取組の特徴

1　スクールカウンセラーを活用した人間関係形成能力の育成
2　年２回の教育相談週間の内容の充実
3　月１回程度発行している教育相談通信の内容の充実

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　スクールカウンセラーを活用した人間関係形成能力の育成

自らの心の危機に対して早期に問題を認識し、心身が不調なときの対応やストレスに対処する能力を育むことを目指し、地歴公民科・保健体育科と連携して、１・２年生を対象にスクールカウンセラーによる心理学講話を行った。

・１年生：テーマ「適応・不適応と精神疾患について」
　＜キーワード＞適応・不適応行動、防衛機制、自己一致、精神疾患
・２年生：社会的自立・職業的自立をめざしたキャリア形成について
　＜キーワード＞キャリア形成において身に付けるべき力、メンタルヘルス、ソーシャルサポート、自己理解、エリクソンのライフサイクル理論

【講話資料】

2　年２回の教育相談週間の充実

自己理解及び他者理解を深め、自分を表現する力や自己肯定感を高めることを目的に、ＨＲ活動（全学年一斉指導）において、コミュニケーションカードを用いたワークショップを実施した。

また、Hyper-QU の結果についての事例検討会を全教員で実施し、生徒の状況について把握し、早期の対応につなげた。

【ワークショップの様子】

3　月１回程度発行している教育相談通信の内容の充実

「心理テスト」のワークで自己理解を深める内容や「心の探究コラム」において、心理学の側面からストレスを抱えないための助言やトラブルに出会ったときの人が陥りやすい心の動きと対処方法についてまとめ、心と行動選択について探究できるようにした。また、スクールカウンセラーの紹介やコメントなどを掲載し、身近な支援者としての位置付けを明確にした。

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施

Google フォームで実施後、生徒個人票でも確認することにより、今後の対応について速やかに担任・学年団とで話し合うことができた。

取組の成果等

○　成果

アセスメントツール「心と身体のチェック」における「環境のストレス」では、特に自己肯定感に関連する項目など、全体的に改善が見られた。また、入学前に不登校傾向の生徒が多かった１年生では、ほとんどの項目で改善が見られた。２年生では、「怒り・イライラ」、「落ち込みや無気力」の数値が低下した。

○　課題

「心と身体のチェック」の結果では、「身体の不調」、「心配や不安」の数値が前年度同様に高い傾向であった。また、「ほっとプラス」の結果では、全体的に他者理解の数値が低くなっており、相手の立場になって考えたり、行動したりといった点に課題がある。

○　次年度に向けて

引き続きストレス対処能力の向上に向けた取組を行うとともに、自己理解・他者理解の向上に向けた取組を行う必要がある。

北海道遠別農業高等学校

課　程：全日制
学　科：生産科学科
生徒数：56 名

本校の目指す生徒像

1　礼儀正しく感謝の気持ちを持ち節度ある行動がとれる人
2　主体的に学び物事を論理的に考え正しい判断ができる人
3　人を思いやり有言実行のたくましさを持ち信頼される人

本校の現状

道内外各地からの入学生が多く、全校生徒の約８割が寮生活を共にしている。

本校の取組の特徴

1　スクールカウンセラーによる自他理解を深める講演の実施
2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
3　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　スクールカウンセラーによる自他理解を深める講演の実施

・全校生徒を対象に、「いじめ防止集会」において、「心のバリアフリー～人と人とのつながり～」をテーマにスクールカウンセラーが講演し、生徒はアサーティブコミュニケーションについての理解を深め、生徒同士の自他理解の一助となった。

2　スクールカウンセラーによる個別のカウンセリングの充実

・希望生徒を対象に、月１回程度スクールカウンセラーによる個別のカウンセリングを実施し、その際に受けた教育相談内容を教職員間で共有し、学校や寮での声かけや特別な支援等に活用するなど、生徒理解の深化に努めた。

3　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施

・「心と身体のチェック」を年２回実施し、ストレスや不安を抱えている生徒を把握することで、日常生活における声かけや相談活動に活用した。

【いじめ防止集会の様子】

取組の成果等

○　成果

・スクールカウンセラーによる講演の実施により、生徒は自己理解を深めるとともに、他者へ相談する力も養う機会となった。また、カウンセリングを希望する生徒も増え、心を支える一助になった。
・定期的なカウンセリング及び教職員への情報共有を実施したことにより、迅速な対応や適切な支援につなげることができた。

○　課題

・教職員について、特別な支援を必要とする生徒への理解及び合理的配慮の実践に課題が見られるため、生徒理解を深める職員研修の実施や支援体制の整備が必要である。
・教職員による「心と身体のチェック」の結果データの共有方法や活用が不十分であるため、アセスメントツールの検証について、一層理解を深める必要がある。

○　次年度に向けて

・今年度の取組を継続しながら、特別な支援を必要とする生徒への協力体制の整備に努める。
・生徒が学校生活を一層意欲的に送ることができるよう、「心と身体のチェック」の結果を活用した職員研修等を行い、職員間や外部機関との連携の強化を図る。

北海道礼文高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：52 名

本校の目指す生徒像
・自ら学び、創造する生徒
・自ら考え、実践する生徒
・自ら鍛え、思いやりのある生徒

本校の現状
各学年 20 名程度の小規模校で、道外出身の生徒も在籍しており、多様な価値観を認め合いながら同じ教室の中で学び合う環境となっている。

本校の取組の特徴
1　スクールカウンセラーによる支援「SC 活用事業によるカウンセリング」
2　性に関する指導との関連「アサーショントレーニング」

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　スクールカウンセラーによる支援「SC 活用事業によるカウンセリング」
スクールカウンセラーが年に４回ほど本校に来校し、生徒たちの悩みや相談に対する支援を行っている。
また、自己理解・他者理解を深め、よりよい人間関係の構築のため、１学年の生徒を対象に「こころをととのえる～マインドフルネスを学びましょう」を実施した。SC を講師に、ストレスの要因や、心身への影響などを学び、その対処法についてグループ演習を行った。

2　性に関する指導との関連「アサーショントレーニング」
少人数のクラスで、お互いを尊重し、アサーティブな表現ができる生徒の育成を目標に、１学年の生徒を対象に実施した。異なる４つの場面でのグループ演習・発表を通して、自分も相手も尊重しながら、コミュニケーションを図るにはどうしたらよいかについて学習した。

※１　その他
・日常的に教育相談便りを発行し、コミュニケーションスキルを身に付けることや援助希求的態度の育成をもとに、自殺予防教育へつなげる取組を実施した。
・宿泊行事などでは、「仲間の良いところを見つけよう」というテーマで、生徒が他者の長所に目を向けるよう工夫した。
・スクールカウンセラーを講師に「協調性と自立心がある大人に成長するために」とのテーマで、PTA 研修会を実施した。愛着障害やその修復及び修復支援についての講義とグループ別の討議を行った。

※２　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施
・休業前後に実施した２回の結果をもとに個人面談を実施した。
・教員がもっている印象と生徒本人の自覚とが不一致である生徒に早期の対応を行った。

取組の成果等

○　成果
・学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果では、各学年とも生徒の集団への満足度は総じて高かった。
・ストレスマネジメントに関する指導を通して、生徒が自己の精神状態を把握しやすくなった。援助希求的態度やストレス対処行動を取ることができるようになった生徒もみられる。
・今年度認知したいじめの状況は、当事者双方が被害を訴えるケースがほとんどであったが、アサーショントレーニング等により、自ら良好な関係を構築する姿勢につながった。

○　課題
不登校傾向の生徒を支援するために、年度当初からアウトリーチ型の支援を行っていく必要がある。

○　次年度に向けて
・スクールカウンセラーと連携・協力して、支援・対策を学校全体で継続的に行う必要がある。
・今年度は個のストレス耐性や援助希求的態度を育てる実践であったが、本事業を通して良好な人間関係を形成し、他者との関わりによって支えられるような学校づくりを目指したい。

北海道雄武高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：60 名

本校の目指す生徒像

1　社会生活を営むための基礎的な力
2　知識を活用し、課題を解決する力
3　自ら自信を持ち、他人を認め、協力する事ができる力

本校の現状

アセスメントツールの分析より、固定的な友人関係や人間関係に悩みを持ち、自尊感情が低い生徒が見られることから、自ら自信を持ち、他人を認め、協力することができる力に課題がある。

本校の取組の特徴

1　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の向上を目指したピア・サポート活動の実施。
2　教育相談スキル向上に資する教員研修の実施。

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の向上を目指したピア・サポート活動の実施

(1) 学年間ピア・サポート【１・２年生】【５月～12 月実施】

・内容　１年生はピア・サポート活動（計６回　仲間理解、話の聞き方、問題解決能力、効果的なストローク、非言語コミュニケーション、アサーション）にて、人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の向上を目指す活動を実施し、２年生はピア・サポーターとして事前に教師からその役割や活動の進め方について学び、支援計画を各活動グループで作成、１年生のピア・サポート活動の支援を行う。

【ピア・サポート活動の様子】

・成果　１年生は円滑なコミュニケーション方法などのスキルを、２年生はピア・サポーター役を担い自分たちで決めたプログラムを実行することで自己肯定感や達成感を得た。

(2) 町民へのピア・サポート活動【３年生・町民（幼児・大人・高齢者）】【８月実施】

・内容　仲間理解～幼児、アサーション～大人、非言語コミュニケーション～高齢者を３年生がピア・サポーターとして町民のピア・サポート活動の支援を行う。

・成果　町民からのアンケートで、次年度も継続して実施を要望されるなどの好評価があり、３年生にとっても良好な人間関係づくりを学ぶよい機会となった。

2　教育相談スキル向上に資する教員研修の実施【全教員】【６月実施】

・内容　北海道教育相談スーパーバイザーである北翔大学山谷敬三郎氏を招き、「効果的な教育相談のあり方～人間関係の構築と生徒理解を深める方法を考える～」をテーマに、コーチング・フローやコーチングにおけるコア・スキルの考え方について、リモートにて研修を実施した。

・成果　日頃、課題と感じている生徒へのアプローチの方法等についての質疑応答が活発に行われ、生徒一人一人をイメージした実践的な内容の研修が行われた。

※　アセスメントツールの定期的な実施と分析等の活用

「ほっと（子ども理解支援ツール）」及び「Ai Grow（資質・能力アセスメントツール）」で読み取ることのできた、生徒の資質と能力の変化について、ストレスや不安を抱えている生徒の様子を教職員間で共有し、日常的な観察や声かけ、個人面談を迅速且つ適切に実施することができた。

取組の成果等

○　成果

「ほっと（子ども理解支援ツール）」の結果より、本校生徒のソーシャルスキルは各項目で全道平均を上回り、特に相手を思いやる（配慮）、リーダー役を担う（率先）、仲間に加わる（参加）、相手をたたえる（称賛）の項目で平均が 3.6 ポイントを超えており（全道平均 3.0）、ピア・サポート活動等の成果であると考える。「Ai Grow（資質・能力アセスメントツール）」では、生徒の資質・能力を可視化することで生徒が自己理解を深め、学校生活をより主体的に取り組む姿勢を育むことができた。

○　課題

生徒の日常的なコミュニケーション力の更なる向上と自己肯定感の醸成に向けた取組を今後も継続して行う。

○　次年度に向けて

今年度より始めた町民へのピア・サポート活動や「ほっと」（子ども理解支援ツール）、「Ai Grow（資質・能力アセスメントツール）」の効果的な活用については、今年度の反省を踏まえ、より一層の充実を図る。

北海道音更高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：248 名

本校の目指す生徒像
「心豊かに生きる基礎を築くために」
・自ら学ぶ　・自ら行う　・自ら鍛える

本校の現状
生徒の人間関係を形成する力の不足や心の不安定さがあるため、適切なストレス対処や援助希求行動の育成を図る必要がある。

本校の取組の特徴
1　総合的な探究活動を活用したコミュニケーション能力の育成
2　スクールカウンセラーによるストレスマネジメント教育の取組

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　総合的な探究活動を活用したコミュニケーション能力の育成

・１、２年次を対象に社会性と情動の学習（SEL）ワークを年間通じて実施した。（自己理解、気持ちの伝達、メールやSNS、傾聴、自分らしさを生かそう、自分の考え方の特徴を知ろう、ストレス対処、上手な頼み方と断り方）
・１、２年次を対象にホワイトボード・ミーティング®を活用したファシリテーションなどの話し合いの方法について学び、「質問の技カード」を用いた対話スキルトレーニングを行った。

【探究活動の様子】

・生徒からは「捉え方を少し変えてポジティブに生きていきたい。」「相手も自分も責めずに解決できるように前向きな考えを見つけていきたい。」「相手の目を見て笑いながら話すと印象が大きく変わることがわかった。会話をする上で相槌や笑顔などは大切だなと改めて思った。」等の感想があった。

2　スクールカウンセラーによるストレスマネジメント教育

・１、３年次を対象にスクールカウンセラーによるストレスマネジメント教育（リラクゼーション法）を実施した。
・漸進性弛緩法、腹式呼吸、総合リラクゼーション法等をご紹介いただき、音楽を流しながら体験した。
・生徒からは「体の力を抜く感覚がわかった。頭がスッキリした。」「漸進性弛緩法は、思ったよりも効果があった。」「とてもリラックスできた。」等の感想があった。

【ｽﾄﾚｽﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ教育の実施】

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施

・日常では気付けなかった生徒の状況を把握することができ、早期に対応することができた。
・長期休業前は余裕を持って実施し、休業前の面談を行う必要がある。

取組の成果等

○　成果

・総合的な探究の時間や教科との連動、スクールカウンセラーの協力等、年間を通じた総合的、重層的な取組みができた。「ほっと」の結果では、ほとんどの項目のポイントが上昇した。

○　課題

・担当者が変わっても継続できるようプログラムの精選及び全教職員の共通理解とスキルの向上を図る。
・「ほっと」「ほっとプラス」「心と身体のチェック」の効果的な活用について研修を深める必要がある。

○　次年度に向けて

・校内の取組及び成果を学校全体で共有し、生徒の実態に応じたプログラムの構築を目指す。
・専門家による校内研修を定期的に開催し、学校全体で生徒理解のスキル向上に努める。

北海道釧路江南高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：586 名

本校の目指す生徒像
叡智：学びで自立できる生徒
希望：夢を追及する生徒
慈愛：思いやりのある生徒

本校の現状
素直で頑張る生徒が多いが、コロナ禍で人間関係構築に課題を持つ生徒が見られる。集団への不適応やストレスマネジメントへのケアが必要である。

本校の取組の特徴
1　予防的教育相談体制の構築・充実
2　援助的希求的態度の育成
3　生徒自身で心と身体の健康状態に気付き、対応できる力の育成

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　予防的教育相談体制の構築・充実
・年５回アセスメントツール「心と身体のチェック」を実施し、自己の状態に気付き、対応する能力を育成できた。
・実施後のアセスメントを全教職員で共有し、ストレス度の高い生徒へ面談やカウンセリングを実施した。
・実施前後に生徒へスクールカウンセラーや教育相談室の利用を案内し、いつでも生活に困り感が出た場合の相談体制を周知した。

2　援助希求的態度の育成
・年度初めに構成的グループエンカウンターを各年次に実施した。クラス替え直後に交流することによって、生徒は安心感を得ることができた。
・各年次で年３回スクールカウンセラーによる、ピア・サポートを実施。生徒に実施する前に教員で研修を行い、教員同士でピア・サポートの意義を理解するとともに、教員間での助け合いの風土を強化できた。

【ピア・サポートの様子】

3　生徒自身で心と身体の健康状態に気付き、対応できる力を育成
・１の他に、生徒が日常的にセルフチェックできるシートを HP に掲載し、困り感があれば、Web 上で、相談を申し込めるフォームを作成した。
・全校生徒にスクールカウンセラーによるストレスマネジメント講座を実施。ほっとプラスの数値が平均値で約２ポイント上昇するなど、ストレスへの対処方法や考え方の変化が見られた。

取組の成果等

○　成果
・構成的グループエンカウンター、ピア・サポートを通して、仲間との意見交換や傾聴のスキルを学び、良好な関係が構築され、年次の仲間として他者への優しさを持った関わりを持とうとする姿勢が育成された。
・「心と身体のチェック」を実施することで、生徒は隠れたストレス（家庭や部活など）を自覚でき、カウンセリング、面談を通して解決する生徒が多くなった。また、担任も数値化された個別シートを用いて面談を実施する等、適切な対応ができた。

○　課題
・各種アセスメントの活用、面談時の声のかけ方、生徒が抱える悩みや苦悩など、現代の健康課題やカウンセリング能力向上に向けた教職員研修が必要である。

○　次年度に向けて
・生徒同士が助け合い、支え合う人間関係づくりを支援する取組を、学校行事を踏まえ適切な時期に計画するなど、効果を高めていく必要がある。また、アセスメントツールの結果を効率的に活用するためにも、校内研修を実施する。

高校生ステップアップ・プログラム実施要項

（平成25年５月17日学校教育局長決定）
（平成28年５月20日一部改正　　）
（平成30年４月６日一部改正　　）
（平成31年４月19日一部改正　　）
（令和２年４月10日一部改正　　）
（令和３年５月６日一部改正　　）
（令和５年４月21日一部改正　　）

１　趣旨

高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

２　事業の実施主体

(1) 本事業は、北海道教育委員会（以下「委員会」という。）が実施する。
(2) 本事業は、文部科学省の委託を受けて実施することができる。

３　事業の内容

(1) 高等学校の取組

ア　集団カウンセリングの実施

実施校は、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため、計画的に集団カウンセリングを実施する。

イ　自殺予防教育の取組の実施

実施校は、「自殺予防教育プログラム」を積極的に活用し、計画的に自殺予防教育の取組を実施する。

ウ　外部人材を活用した取組の実施

(ｱ) スクールカウンセラーによる支援

実施校は、「心と身体のチェック」等による生徒のアセスメントに基づき、生徒への集団カウンセリングやアセスメントの実施及び本事業の実施のための指導助言、教員研修等に、積極的にスクールカウンセラーを活用する。

ただし、スクールカウンセラーの活用時間数については予算の範囲内とする。

(ｲ) 北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム員（以下「支援チーム員」という。）の活用

実施校は、生徒指導上の諸課題の解決に向けた取組の教員研修等に、積極的に支援チーム員を活用する。

エ　成果の検証

実施校は、本プログラムの成果を、次の(ｱ)から(ｵ)の項目により検証する。

(ｱ) 子ども理解支援ツール「ほっと」、アセスメントツール「心と身体のチェック」等を用いた客観的な指標に基づく評価

実施校は、「ほっと」等による調査を複数回実施し、上記ア、イに掲げる取組の成果を検証する。

(ｲ) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率の変化
(ｳ) その他の生徒の状況
・上記ア、イの取組における生徒の感想
・上記ア、イの取組における生徒の活動状況の観察
(ｴ) 外部人材の活用状況
(ｵ) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

オ　学校プログラム（成果のまとめ）の作成

実施校は、上記ア～エの実施状況、成果や課題を踏まえ、他校の参考となるよう、実施時期や内容、参考資料等を取りまとめた学校プログラム（成果のまとめ）を作成する。

(2) 委員会の取組

ア　運営協議会の開催

委員会は、本プログラムの円滑な実施に資するため、実施校の職員、スクールカウンセラー、所管教育局高等学校教育指導班担当指導主事等の参加を得て運営協議会を開催する。

イ　集団カウンセリング研修会の開催

委員会は、実施校における取組の充実を図るため、実施校の教員等を対象に集団カウンセリング研修会を開催する。

ウ　取組状況の広報

委員会は、全道立高等学校における不登校や中途退学の未然防止、自殺予防の取組の充実に役立てるため、本プログラムの取組状況の広報に努める。

エ　北海道教育カウンセリングＩＣＴ活用事業による支援

委員会は、スクールカウンセラーの継続的な派遣が困難な地域に対し、音声と映像の双方向情報通信技術を活用した北海道教育カウンセリングＩＣＴ活用事業により支援する。

ただし、実施校数には限りがあること。

4　事業実施に当たっての留意事項

(1) 実施校は、事業終了後においても、学校独自でプログラムを継続的に実施することを想定した計画の策定及び検証を行うこと。

(2) 実施校は、スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談の手法や集団カウンセリング、アセスメントに関する教員研修を実施し、知識や手法の習得の他、本プログラムに関する教員間の共通理解を深めること。

(3) 高校１年生に重点を置いて、仲間づくり支援やコミュニケーションスキルを育成する集団カウンセリングを実施すること。

また、国立・道立青少年教育施設において宿泊研修を実施する場合は、当該施設職員と連携し、集団カウンセリングを実施すること。

(4) スクールカウンセラーによる生徒への集団カウンセリングや教員研修は貴重な機会であることから、実施校は支障のない範囲内で、近隣校と連携して実施してよいこと。

(5) スクールカウンセラーの活用については、次の事項に留意すること。

ア　スクールカウンセラーの人材確保については、実施校が行うこと。

イ　予防的・開発的教育相談の手法は多様であることから、必要に応じて複数のスクールカウンセラーを活用してよいこと。

ウ　スクールカウンセラーの任用、報酬等の支給事務等については、「北海道公立学校スクールカウンセラー（非常勤）設置要綱」（令和３年３月31日学校教育局長一部改正）によること。

(6) 支援チーム員の派遣については、「北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム実施要項（令和２年３月31日学校教育局長一部改正）によること。

5　実施期間

原則として１か年とする。

ただし、１年を超えて継続の希望がある場合は、取組状況や事業成果等に基づき委員会が継続を決定する。

6　事業の実施手続

(1) 事業の実施を希望する道立高等学校は、実施計画書（別記様式１）及び所要経費計画書（別記様式２）を添付し、委員会に申請する。

(2) 委員会は、上記(1)により提出された実施計画書等の内容を審査し、実施校を決定する。

(3) 実施校は、実施計画書等の内容を変更する場合は、速やかに委員会に報告し、その指示を受けること。

7　事業の報告

(1) 実施校は、実施報告書及び所要経費報告書を作成し、当該年度の指定された期日までに、委員会に提出すること。

(2) 支出関係書類については、他の経費と区分して適当な帳簿を用いて整理し、使途を明らかにするものとし、事業を実施した翌年度から５年間保存すること。

8　その他

(1) 委員会は、必要に応じ、事業の実施状況及び経理状況等について実態調査を行うこと。

(2) この要項に定めのないものは、委員会及び実施校が協議の上、決定すること。

附　則

この要項は、平成25年５月17日から施行する。

この要項は、平成28年５月20日から施行する。

この要項は、平成30年４月６日から施行する。

この要項は、平成31年４月19日から施行する。

この要項は、令和２年４月10日から施行する。

この要項は、令和３年５月６日から施行する。

この要項は、令和５年４月21日から施行する。